

8. 肝シンチグラフィーにおける右側面像の有用性について

○樋口 和博 坂田 博道
中条 政敬 園田 勝男
篠原 慎治
(鹿児島大・放)

肝シンチグラフィーの実施に除して今日では、診断機器・核種の開発により短時間に多方向の像が得られるようになり、鹿大付属病院 RI センターでも routine に4方向の view で読影を行なっているが、今回我々は右側面像につき検討を加えてみた。

一般に正常の右側面像は、後上方より前下方に長軸を有するほぼだ円形の形を成し、ときに、腹側下縁及び後上縁に陥凹が認められることがあるので、これらの部位に病変の存在が疑われる際は、このことを念頭におく必要がある。

ヘパトーマ乃至は嚢腫等肝内の SOL では、右側面像にても欠損影としてあらわされるが、特に右側面像の有用性は小さな SOL が肝後縁に存在する場合の検索においてであり、多発性のものでは前面像と併してその局在、数、大きさを知る上にも是非とも必要である。

肝炎例においては、両葉が腫脹することが多くこの場合の右側面像では、非特異的乍ら前述の腹側下縁の陥凹の消失と、上下前後四方向への凸の腫脹がみられ、全体的に円みを帯びてくる。

また肝硬変症では、前面像において典型的とされる右葉萎縮、左葉相対的腫大型を始めとして肝炎例と同じく腹側下縁の陥凹と鈍化があり、更に病変が進行するにつれその形がいびつとなり変形を来すようになることが主な所見といえよう。

勿論肝外性の腫瘍とりわけ右後腹膜腫瘍においては、肝右葉の前彎など予想され、その診断に際しても右側面像の有用性はいうまでもないことである。

以上の諸点につき右側面像が有用であった症例を供覧し乍ら報告した。

9. 消化管癌手術前における肝シンチゲラムの検討

○宮内 貞一 土器 訓弘
城 邦男
(福岡大・放)

消化管癌の手術例において、肝転移の有無は手術適応及び予後の判定に重要な役割をはたしている。我々は福大病院開設以来2ケ年間に於ける、消化管癌(食道癌、胃癌、結腸癌、直腸癌)94例について肝 Scintigram の検討を行った。94例の内29例(31%)が space occupying lesion (S.O.L.) が陽性で、65例(69%)が S.O.L. が陰性であった。手術前の肝 Scintigram 及び生化学的検査を検討し、生化学的に異常を認めず、S.O.L. の陽性は20例(21%)にみられた。胃癌、直腸癌においては30%の高率で認められた。生化学的には正常と思われる所見について、肝 Scintigram S.O.L. が20%の頻度でみられたことは、S.O.L. が転移性肝癌を示唆しているとはかぎらないが、肝 Scintigram 上異常所見がみられることは予後の判定に有効な検査であると考ええる。

10. 脾シンチグラムの臨床的検討

○石神 詰一 福井康太郎
藤村 憲治 片山 健志
(熊本大・放)

過去3年間に於ける脾シンチグラム撮影は約650例に達する。そのうち確定診断の得られた症例99例を対象として、臨床的検討を行なったので報告する。

症例の内訳は脾癌42例、慢性脾炎36例、脾のう胞16例、その他5例である。

1. 脾癌では部分的欠損像を示したものは26%であり、非薄欠損を示したものは55%であった。また特に脾頭部癌では72%の症例において非薄欠損の所見が認められた。

2. 慢性脾炎では摂取不良像(非薄像)が特徴的な所見と考えられる。